

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月27日現在

機関番号：32616

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16903

研究課題名(和文)近世における井伊家旧領地間のネットワークに関する基礎的研究

研究課題名(英文)Basic research on relationship of Hikone the territories of the li family and linoya their ancestor's hometown in the Edo period.

研究代表者

夏目 琢史(Natsume, Takumi)

国土館大学・文学部・講師

研究者番号：00747842

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、江戸時代における彦根井伊家と遠江国引佐郡井伊谷(現在の浜松市北区引佐町)周辺との交流・つながりについて検討したものである。江戸時代初頭、井伊氏が遠江国井伊谷から彦根へと移って以降も、井伊谷に古くから存在した井伊谷龍潭寺を中心として、両者はつながりを持ち続けた。本研究では、その実態について、民間レベルでの交流も含めて考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、中世(戦国期)の由緒が、江戸時代の人びとに、具体的にどのような影響をもたらしたのかという点について、領地を越えた移動に注目したことにある。また、社会的意義としては、従来ほとんど研究されていなかった史料を見つけ出し、研究の素材として活用できるよう整備したことが挙げられる(井伊谷中井家文書など)。

研究成果の概要(英文)：In the early Edo period, the li family was assigned to the lordship of Hikone (Shiga Prefecture). However, originally, the li family's seat had been at linoya in Totomi province (present-day Hamamatsu city of Shizuoka prefecture). This research considers the history of cultural exchange between Hikone and linoya, and Ryotanji had become a place of their exchange.

研究分野：日本近世史

キーワード：井伊氏 井伊谷 移動 由緒

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、近世大名井伊家の先祖故郷(旧領地)である遠江国井伊谷周辺(上野国高崎・箕輪、遠江国掛川等も含む)と彦根藩・与板藩との関係性を様々な角度から考察することをめざしたものである。

本研究の元々の背景は、これまで研究代表者が実施してきた井伊谷龍潭寺文書の再調査によって、江戸時代を通じて彦根井伊家が、先祖故郷である井伊谷の菩提寺龍潭寺へと参詣していた様子が具体的に明らかになってきたことにある(拙著『近世の地方寺院と地域社会』同成社、**2015年**)。これにより、**18世紀前半から19世紀にかけて**、当該地域(遠江国井伊谷周辺)において、井伊家との由緒(遠江井伊氏の活躍。具体的には、南北朝期に宗良親王に従って活躍したとされる井伊道政や、戦国期に徳川家康のもとで活躍する井伊直政にかかわる由緒)が強調され、井伊家の故郷としての地域意識が定着してくるメカニズムが解明できた。ここでは、**17世紀の一時**、井伊家が彦根藩・掛川藩(与板藩)へと移ってから、龍潭寺文書のなかには、井伊家との直接的な関係性を示す史料があまり見られないため、**18世紀前半**、祖山和尚が龍潭寺住職に就いてから、井伊家との活発な交流が生まれていったのではないかと論じた。

しかしながら、上記の研究は、あくまで、遠江国井伊谷(現在の静岡県浜松市北区引佐町周辺)の史料に依存したものであり、彦根井伊家側の史料をほとんど踏襲できていないという問題を抱えていた。本研究は、彦根(井伊家)側・遠江(井伊谷)側双方の史料をみることによって、より立体的に**18世紀前半から19世紀にかけての実態**を考察することをねらったものである。

また、本研究では、そこからさらに発展させ、井伊家の上層部だけではなく、各藩士や民間レベルにおいても、江戸時代には、井伊谷と彦根との間に何らかの密接なつながりがあったのではないかと仮説も立てた。井伊家当主の井伊谷龍潭寺への参詣は、当然、多数の藩士が同伴するものであり、井伊谷村においても多くの住民がこれに関わることになり、当然、そこから様々なレベルでの交流が生じたと考えられた。本研究では、その点についても、できる限り明らかにしようと試みたものである。

なお、上記してきた研究動機の背景には、二つの研究史の潮流が意識されている。一つは、近年、大きな実証的な成果が寄せられている藩政史研究に対する問題意識である。藩政史は、古くから日本近世史のなかで蓄積されてきた研究分野の一つではあるが、近年、**1990年代以降**の地域社会論・身分的周縁論の影響を受けつつ、藩内の様々な活動について、「藩地域」などの用語を用い、従来はあまり注目されていなかった藩領内の様々な活動が注目されるようになってきている。本研究においても、そうした研究史からの影響を受けつつ、藩という枠組みでは必ずしもおさまらない部分での、藩領を越える活動に注目しようと試みた。そこから大名権威の問題(日本の近世権力の特質)を考察していくことをねらいとした。

また、もう一つは、**1990年代**に活発に議論された近世由緒論に対する問題意識である。周知のように、由緒論は、国民国家論・記憶論の影響を受けつつ、山本英二氏らによって進められてきた一連の重要な研究成果のことを指すが、由緒が政治や社会(人びとの生活や暮らし)の活動にどのように影響を及ぼすかについては、あまり明らかにされてこなかった。本研究は、<由緒が語られる>ことによって、<人びとの交流が促進される>という構図を実証することで、こうした研究史にも一石を投じることを企図したものであった。以上が、本研究を開始する当初の主な研究背景・動機である。

2. 研究の目的

1で述べたような背景をもとに、本研究では三つの目的を設定した。一つは、彦根・与板側にのこる史料から遠江井伊谷の存在を考察すること。二つめは、彦根・与板以外の人びとの間で、井伊家の権威がどのように意識されたのかを考察すること。三つめは、遠江井伊谷周辺の住民の井伊家に対する意識をより具体的に(井伊谷龍潭寺文書以外からも)明らかにすること。以上である。ここでは、それぞれの目的について具体的に述べる。

(1) 彦根(与板)からみた遠江国井伊谷

周知のように、遠江国井伊谷は、井伊氏の支配が離れ、旗本近藤氏の領地として江戸時代を通じて展開した。しかしながら、1で述べたように、実際には、**18世紀後半から19世紀にかけて**、幕閣の重役である彦根井伊家が、井伊谷龍潭寺へと井伊家先祖の墓参のために参詣がおこなわれた。こうした行動の背景には、彦根藩内における由緒意識の問題が介在している。本研究では、この点をできるだけ史料にもとづき明らかにすることを目的とした。すなわち、ここで、下記の三つの点が論点となった。

彦根藩の内部で、井伊家の故郷(遠江井伊氏の出身地)である遠江国井伊谷は、どのように認識されていたのか。

彦根藩士の間で、先祖故郷に対する温度差はなかったか。すなわち、彦根藩士のなかにも井伊谷を故郷とする一族とそれ以外の一族があり、彼らの間で対立はなかったのか。

井伊家当主が井伊谷へ参詣することに、どのような政治的意味があったのか。

の点については、時系列をとらえることが重要となる。すなわち、井伊家が井伊谷から離れてから二百年以上も経た**19世紀前半**においてもなお、彦根井伊家による参詣が実施されて

いることを考えると、江戸時代一貫して彦根井伊家（あるいは与板井伊家も含む）は井伊谷への故郷意識を有していたことが想像される。しかしながら、この二百年の間には、明らかに波があったと考えられる。その点について明らかにすることを本研究では主な目的とした。

の点については、彦根藩（あるいは与板藩）の内部で、井伊谷に対する由緒意識をもつ者とそうでない者が、どのように共存していたのかを解明し、誰が、井伊谷への当主参詣を積極的に呼びかけたかを考察する必要がある。ここでは、彦根藩の役務として、井伊谷参詣や井伊谷の史跡調査を担当する藩士と、自家の先祖故郷として井伊谷へと自発的に由緒意識をもつ藩士とを精査する必要も生じた。

の点については、～の点をふまえたうえで考察していく必要がある。彦根井伊家にとって、先祖の故郷である井伊谷参詣をすることは、自らの先祖（井伊直政・直親）の活躍（徳川家康との親密な関係と戦功）を強調することは、近世初頭の秩序を再確認する意味もあったと考えられる。この点を考察していくことも本研究の大きな目的であった。

（２）井伊家ゆかりの地における由緒意識

戦国時代、徳川家康のもとで活躍した井伊直政は、井伊谷だけではなく様々な地域にその足跡をのこしている。とくに、家康の関東移封後は、箕輪・高崎に拠点を置いて活動した。さらに様々な合戦で活躍した井伊直政は、合戦の跡地周辺にも様々な由緒をのこしている。また、井伊直政の実父・直親も、旧領とはいえないが、一時期、信州松源寺（長野県高森町）へと逃亡しており、井伊家とゆかりのある地は、広範囲にわたっている。こうした各地にみられる由緒意識を、由緒書（古文書）のなかにとらえ、さらにそれが、歴史を通じた人びとの交流などへとつながったか否かについても明らかにする必要があった。

本研究では、こうした彦根 井伊谷以外の井伊家ゆかりの地における関連古文書の調査も、大きな目的とした。

（３）遠江国井伊谷周辺における関連古文書の再調査

三つめの目的は、遠江国井伊谷周辺地域における関連古文書の再調査である。すでに述べたように、井伊谷龍潭寺の古文書は、これまでの研究でほぼ網羅できたと考えられるが、井伊谷周辺にはまだまだ未発見の近世史料が存在している可能性もあった。というのも、『引佐町史』の編纂終了後、引佐町が浜松市に合併されたことともない、当地の古文書に関する保管状況は、あまり良い状況にあったとはいえない。よって、本研究では、『引佐町史』編纂期に確認された史料の現状確認（再調査）と、新たな史料の発見も、本研究の大きな目的の一つであった。

というのも、これまでの研究のなかでは、井伊谷龍潭寺文書から、江戸時代の井伊谷周辺住民が、井伊家参詣などの際に、掃除・橋普請・食事接待などの役割を担っていたことは確認できていたが、村側の史料からその実態は位置づけられていなかった。この点を史料にもとづきながら明らかにすることが、本研究の推進においては、きわめて重要であった。

なお、NHK 大河ドラマの放映などに関連し、地域に暮らす人びとの史料に関する意識が高まったことともない、従来確認されていなかった新たな史料を複数確認することができた。これについては後述する。

以上（１）～（３）までの三点が、本研究における主な目的であったといえる。

3．研究の方法

2で述べた目的をもとに、「基礎的研究」を標榜する本研究では、あくまで古文書の再整理と内容の把握を重視しつつ、下記のような方法で研究を推進していった。2で挙げた三つの目的（１）～（３）に添いつつ、以下で述べる。

（１）彦根(与板)からみた遠江国井伊谷

本研究では、彦根城博物館に所蔵されている「井伊家文書」等の古文書および『彦根市史』等ですでに公開されている史料集などを用いて研究を進めていった。とくに「井伊家文書」のなかには、彦根井伊家側の遠江国井伊谷認識がうかがえる史料がいくつか確認された。なかでも注目されたのは、井伊谷村の神主中井氏から送られたとみられる史料（由緒書・地誌など）が、複数確認されたことである。こうした史料をもとにして、本研究では、2で挙げた研究の目的について考察していく方法をとった。

（２）井伊家ゆかりの地における由緒意識

本研究では、先述した「井伊家のゆかりの地」において、江戸時代にどのように井伊家のことが認識されていたのか把握していくことを目的とした。そのためにとった方法論としては、まず、戦国期の井伊氏の活動範囲を確認したうえで、それに関連する地域の自治体史（『長野県史』『群馬県史』『新潟県史』『掛川市史』など）の読み込みをおこなったうえで、関係の文書館等で実物資料の調査などを実施した。その詳細については後述するが、群馬県高崎市周辺の一

部の寺院文書のなかで、井伊谷龍潭寺に類似した史料群を見つけることに成功したが、概して井伊谷以外の地域において、由緒書等のなかに井伊家の存在を認めるのは、当初の目的に反して難航した。むしろ、史料がほとんどみつからないことの意味について、あらためて考察していくことが求められた。その点についても後述する。

(3) 遠江国井伊谷周辺における関連古文書の再調査

研究の方法のなかで、当初の予想に反して最も重点を置かなければならなかったのが、(3)の井伊谷周辺の再調査であった。すでに述べたように、大河ドラマ等の影響で、当地における史料環境の整備に対する意識が急速に高まったことにもない、多くの史料が発見されることになった。とくに本研究に直接的に関連するものとしては、井伊谷村中井家文書の再発見である。従来、井伊谷村中井家文書(二宮神社神主中井家に所蔵されていた文書)については、『引佐町史』編纂期に整理された数百点の文書が確認されていた。しかし、それとは別の文書(総点数約2000点)が、群馬県でほぼ未整理の状態で見られ、井伊谷龍潭寺文書へ移管されることになった。

二宮神社神主家中井家は、井伊谷周辺の旧家(南北朝期の由緒を有する)であり、近世前期には『中井日記』などを執筆したことで知られている。近世の後半期には、『礎石伝』(中井直恕)という地誌を叙述するなど、地域の歴史に関する考察を深めた文化人の家としても知られていた。先述したように、本研究においても(1)の点からも、彦根井伊家との交流のなかで、中井家の果たした役割の大きさが確認されていたため、本研究ではこの史料の目録化を実施する必要が生まれた。

具体的な方法論としては、近世の古文書目録を作成した経験をもつ複数名の研究者に協力を依頼して、当該文書の保管と目録化作業をおこない、江戸時代の文書に関してはすべて目録をとることに成功した(明治・大正・昭和期の文書類を集めた1箱が未整理のままである)。

本研究は、あらたに確認されたこの井伊谷町中井家文書(以下、「中井家文書補遺」とする)の内容の分析をもとに進めていくことになった。

4. 研究成果

江戸時代における井伊谷旧領間の交流を調査する目的で進めてきた本研究の成果を述べるにあたり、前提として、二つの点を確認しておく必要がある。一つは、当初の予測に反して、井伊谷彦根(与板)以外の交流を示す史料があまり見つからなかったことである。また、もう一つは、当初の予定を越えて、遠江国井伊谷周辺の新史料が発見されたことである。これにもとづき、1で示した(1)~(3)の目的に沿いながら、その成果を述べていくことにする。

(1) 彦根(与板)からみた遠江国井伊谷

井伊家の先祖故郷・遠江国井伊谷についての彦根側からの認識について、彦根城博物館所蔵の「井伊家文書」から明らかになった主な点について二つ述べる。

彦根系譜方の活躍

まず、江戸時代の後半期、彦根系譜方と呼ばれる役職の人びとが、井伊谷周辺の史跡などの調査を実施していたことである。この系譜方の詳細については不明な部分も多いが(財源不足かスタッフの増員の希望が出されている)彼らによって、井伊家の旧跡が活発に調査されていた様子がうかがえた。ここでは、井伊谷だけではなく、たとえば新野左馬助の出身地(御前崎市の新野)などについての調査も念入りに行われていたことも確認された。また、史跡調査においては、どうしても調査対象地の人びとの協力が必要となり、そのことが、間接的に、地域における由緒意識を高める大きな契機になっていたことが明らかになった。なお、こうした調査にもっとも積極的であった一人に、長野義言の存在が挙げられる。今後は、長野義言が、井伊谷周辺の井伊家旧跡調査になぜ積極的に取り組んだのかについても検討の対象としていく必要がある。

井伊谷側住民からの働きかけ

の他方、江戸時代の後半期には、井伊谷村側からも、神主中井氏を中心に井伊家へ由緒書を提出するなど、活発なロビー活動が展開されていることも明らかになった。また、これは、井伊谷だけではなく、その周辺の村々(渋川村・久留女木村など)も深く関係している。すなわち、井伊家との関係を考える際に、井伊谷村だけではなく、より広い地域(遠江井伊氏の支配領域)を対象としなければならない点も、本研究によって確認できた。

さらに、こうした井伊家の史跡調査においては、たしかに僧侶や神職がイニシアティブをとっているが、当地の旧家を巻き込んで行われていたことがあらためて確認できた点も大きいと考えられる。

と どちらが先か

なお、ここで問題となるのが、と のどちらが先(主)かという点である。しかし、と は、ほぼ同時期に起きており(の方が少し早い)相互に影響しあったと考えるべきである

う。すなわち、対象地域となるべき井伊谷側に、井伊氏故郷地としての由緒意識（あるいは、その背景にあるとみられる政治意識）が、広く共有されていた点が大いと考えられる。本研究においては、こうした実態が、従来よりも明確に史料に即して位置づけることができた。

（２）井伊家ゆかりの地における由緒意識

先にも述べたように、井伊家ゆかりの地における由緒意識については、当初の予定に反して、ほとんど確認できなかった。しかしながら、その反面は、井伊谷以外の静岡県内の地域において、井伊氏への由緒意識が確認された点は大い。とくに、掛川周辺地域において、井伊家との由緒意識がみえてくる点は重要である。しかしながら、当該地域の江戸時代の史料の残存状況は、現時点では良いとはいえない。今後は、とくに御前崎市新野周辺の史料調査などを進めて、江戸時代における地域住民の活動についても考察していくことが必要であろう。

また、他地域において、井伊氏に関する由緒意識がほとんど確認されないという点も重要な問題を投げかけている。それは、井伊谷村の特徴を際立たせているということだけではなく、江戸時代におけるその地域の政治的特質（藩政の問題）との関連も不可分である。また、彦根藩のかかわりの方の相違なども興味深い点である。この点については、今後の研究課題としたい。

（３）遠江国井伊谷周辺における関連古文書の再調査

さて、本研究のなかでもっとも力を入れることになった遠江国井伊谷周辺の古文書再調査（具体的には、中井家文書補遺の調査）について、目録を作成していく過程のなかで確認できた事項について明らかにしておきたい。

18世紀の井伊谷町中井氏の活動

まず、本文書群のなかで注目されたのが、中井家が井伊谷町の本陣をつとめていたことが確認できたことである。この点は、これまで把握されていた中井家文書からはみえてこなかった点である。新しい史料によれば、文化年間に井伊谷町で大きな火災が起こり、それを理由に、中井氏は本陣を辞退することを願い出ていることがうかがえる。これはその後、中井氏が井伊氏の権威を求めていくこと（井伊家の井伊谷参詣を求めていくこと等）と分けて考えることはできない。周辺の史料を含めて、中井氏が、当地の領主である旗本近藤氏ではなく、井伊氏の権威を求めていく様子がある程度概観していくことができる。本研究によってその素地が整ったといえる。

神主中井伊予（直恕）の広範な活動

井伊谷二宮神社の神主として、もっとも幅広い活動を展開した中井直恕については、『引佐町史』編纂時に把握されていた中井家文書からもある程度は明らかであった。しかし、中井家文書補遺の調査により、中井伊予の他方面にわたる幅広い活動（とくに神職として、あるいは学問的な交流など）が明らかになっていく。とくに、本研究との関連で注目したいのは、彦根系譜方などの彦根の役人たちとの交流がうかがえる史料（書簡等）が確認できた点である。こうした記録は歴大であり、その全貌の把握については、さらに時間を要する。しかし、本研究によって目録を完成させたことにとともに、それを研究していくための重要な基盤が整備されたと考えられる。

18世紀中ごろから19世紀にかけての「中井日記」

中井家文書補遺の整理によって明らかにできた（あるいは、できるであろう）重要な点の一つとして、「中井日記」の発見がある。周知のように、「中井日記」は、江戸時代の初頭に中井直頼が書いたものが、『静岡県史』にも収録され、日本近世史研究のなかで大きな研究成果を生んできたものである（たとえば、佐藤孝之『駆込寺と村社会』吉川弘文館、2006年）。今回の調査によって、その続編というべき、享保期以降の体系的な日記を確認することができた。この記録も歴大であり、その調査もさらに時間を要するところではある。しかし、今後の研究において、確実に重要な基盤となるべき素地を形成することができたと考えられる。とくに、井伊谷と他地域とのあらゆるレヴェルでの交流（ネットワーク）に注目する本研究においても、この日記の存在はきわめて重要である。今後、この史料の読み込みをおこない、学会発表や論文をまとめていくことにしたい。

なお、本研究において、もっとも時間を要した（３）については、目録を完成させて、関係機関に送付し、その内容分析も進めることができた。その意味で、「基礎的研究」としてはある程度の成果を産み出すことができたが、論文等の学術的成果の発表にまでは至っていない。今後、この調査の成果をもとにした、論文を発表していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計1件）

夏目 琢史、彦根藩による遠江国井伊谷の旧跡調査について、国土館史学、22号、査読無、

〔その他〕

古文書目録（報告書）

夏目 琢史、引佐町久留女木 仲井家文書仮目録 近世篇、2017年3月22日作成

夏目 琢史、引佐町関係古文書 井伊谷町中井家文書仮目録・久留女木仲井家文書仮目録・青砥区有文書仮目録、2019年2月27日作成

6. 研究組織

「研究分担者」等は、おりません。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。